

住教育シンポジウム

「みんなで考えよう！ふくいに住まい方」

～次世代につなぐ ふくいの住まい、まち並み、住まい方～



住教育シンポジウムの内容

福井県土木部建築住宅課

目 次

住教育シンポジウム開催趣旨	1
住教育シンポジウムの概要	2
住教育シンポジウムの様子	2
出演者のプロフィール	3
基調講演 「地域資源を活用した住まい・まちづくり学習」	4
パネルディスカッション	18
参加者アンケートの結果	38

住教育シンポジウム開催趣旨

福井県は古来、大陸から港への玄関口として、街道も古い時代から発達し、交通の要衝として重要な役割を果たしてきました。各地に宿場町、城下町など伝統的なまち並みが残り、また、奇勝・東尋坊、越前海岸に代表される自然景観、静かな農村の風景などの優れた景観があります。

また、住環境においては、三世代同居率（全国第2位）や持ち家住宅率（全国第3位）が高く、1住宅あたりの延べ面積（全国第2位）が大きいなど、福井県には暮らしやすい基盤があります。これは、家族のつながりや絆がしっかり残っていて、福井の充実した子育て環境や優れた教育、高齢者の元気を支える大きな力となっています。こうしたことが評価され、福井県民は昨年、法政大学の研究チームにより「日本でいちばん幸せな県民」に選ばれました。

私たちはこのような福井の資源や地域特性を県民の誇りとして再認識し、次の世代に守り伝えていく必要があります。

そこで、平成24年3月に改定した「福井県住宅・宅地マスタープラン」においては、「ゆとりある豊かな住生活の実現～次世代につなぐふくいの住まい方～」を基本理念に、本県独自の取り組みとして「住教育」を重点施策の一つに位置付けています。それぞれの地域で暮らす子どもから大人まで、自分たちの住んでいる地域の良さに気づき、誇りを持ち、次の世代に住環境（住まい、まち並み、住まい方）をより良い形で継承するために、住教育を実践しております。

今回、県民の皆様幅広く住教育について関心を深めていただくために、住居学の専門家で住教育を実践されている大阪教育大学の碓田教授による基調講演と、モデル地区で活動されている地区住民代表者によるパネルディスカッションで構成する、住教育シンポジウムを開催することになりました。今回のシンポジウムによって、皆様一人ひとりが住まいやまちづくりに関心を持ち、理解を深め、福井の優れた景観や豊かな環境を次の世代に残していく行動につながることを期待いたします。

福井県土木部建築住宅課長
井上 邦夫

住教育シンポジウムの概要

- 日 時 平成24年10月27日（土）10：30～12：40
- 場 所 福井県産業会館 本館2階
- 主 催 福井県

《プログラム》

1 基調講演（10：30～）

演題「地域資源を活用した住まい・まちづくり学習」

大阪教育大学教授 碓田 智子

2 パネルディスカッション（11：30～）

コーディネーター 五十嵐 啓（福井工業大学准教授）

コメンテーター 碓田 智子（大阪教育大学教授）

パネリスト

小川 利男（社団法人福井県建築士会南越支部）

朝倉 英俊（NPO 法人今庄旅籠塾事務局長）

石畝 正樹（社団法人福井県建築士会勝山支部）

高島 信義（立待公民館前館長、たちまち子ども文楽団長）

住教育シンポジウムの様子



基調講演



パネルディスカッション

出演者のプロフィール（敬称略）

●基調講演講師／パネルディスカッションコメンテーター

碓田 智子（うすだ ともこ）

大阪教育大学 教育学部 教養学科 教授 博士（学術）

大阪市立大学大学院博士後期課程修了。福井大学教育地域科学部に1995年4月から2002年9月まで勤め、2002年10月に大阪教育大学教育学部へ移籍。専門分野は、住居学、住宅計画、住環境教育、住宅施策など。大阪市立住まいのミュージアムと共働して住教育実践を行うほか、兵庫県神戸市などの住教育にも関わっている。（一財）住宅総合研究財団研究助成選奨などを受賞。

●パネルディスカッションコーディネーター

五十嵐 啓（いがらし ひろし）

福井工業大学 建築生活環境学科 准教授

京都大学工学部建築学科卒業。ゼネコンの設計部で数多くの建築物の設計に携わる。専門分野は、都市計画、建築計画、建築史、意匠など。福井県建築士会設計コンペ優秀賞などを受賞。

●パネルディスカッションパネリスト

小川 利男（おがわ としお）

社団法人福井県建築士会南越支部 / 越前市タンス町界限

郷土の歴史や文化を継承するため、建築士会南越支部はもとより武生ルネサンス、武生立葵会に参画し、幅広いまちづくり活動をしている。

朝倉 英俊（あさくら ひでとし）

NPO 法人今庄旅籠塾事務局長 / 南越前町今庄宿

今庄の町並みや文化の保全継承を進めるなど、今庄地区の活性化のため住民主体の自立したまちづくりを目指し活動をしている。

石畝 正樹（いしぐろ まさき）

社団法人福井県建築士会勝山支部 / 勝山市片瀬地区

勝山青年会議所理事長や勝山市エコミュージアム協議会長などを歴任し、地域に根差したまちづくり活動をしている。

高島 信義（たかしま のぶよし）

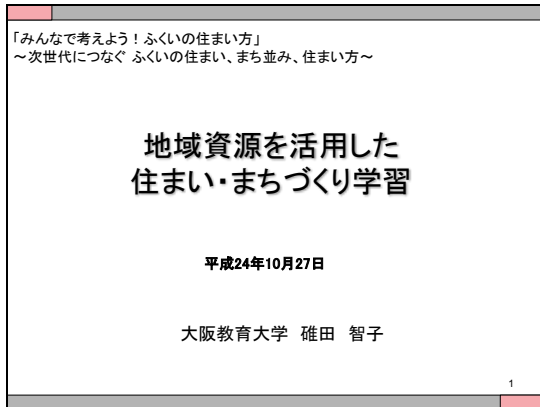
立待公民館前館長、たちまち子ども文楽団長 / 鯖江市吉江地区

平成24年3月まで立待公民館長を務め、6月に「たちまち子ども文楽」を発足するなど、地元のまちづくり活動をしている。

基調講演

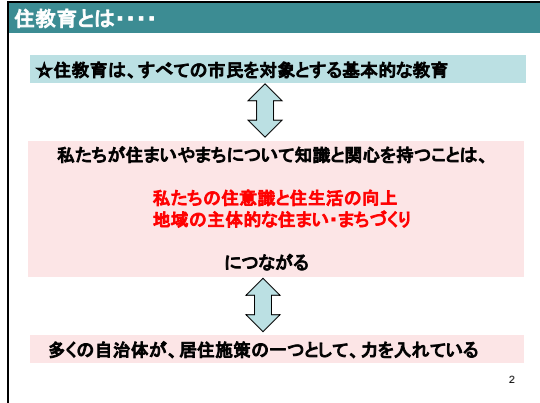
演題

「地域資源を活用した
住まい・まちづくり学習」
大阪教育大学教授 碓田 智子



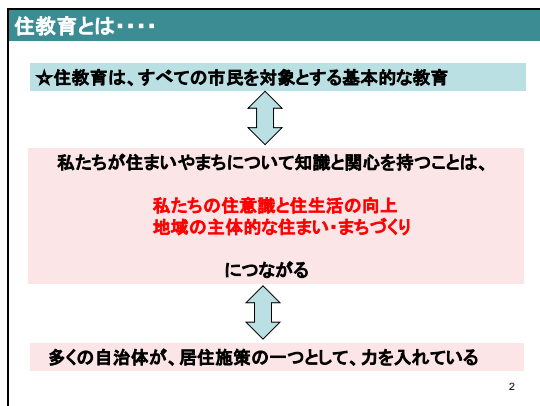
ご紹介いただきましたように、私は平成14年まで福井大学の教育地域科学部で住居学を担当し、その後、大阪教育大学のほうに就きまして、今に至っております。本日はまた福井県にお招きいただき大変うれしく思っております。どうぞよろしく願いいたします。

それでは今日は、今回の住教育シンポジウムの副題にありますように、次世代に地域の「住まい」「まち並み」「住まい方」をどのようにつなぐとよいかということを考えるにあたりまして、地域資源を活用した住まい・まちづくり学習について、お話しさせていただきます。



さて、その前に唐突ですが、皆さん、住教育とは何かについて少し考えていただきたいと思います。どうして「教育」のことなのに、教育委員会ではなくて、県の土木部建築住宅課がこうしたシンポジウムを開催するのでしょうか。今日の本題に入る前に、まず、そんなところからお話したいと思います。

私たちが、地域に「住む」という行為を日常的にしていることから言うと、「住教育」はすべての市民を対象とする基本的な教育だと言えます。私たちが、自分の住まいやまちや地域について知識を持ち、関心を持つと、それが私たちの住生活の向上につながり、さらには地域の住まいづくりやまちづくりにつながります。

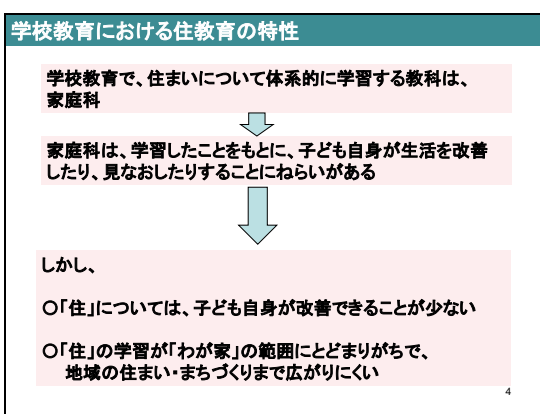


1990年代の終わり頃から、市町村や県で、まちづくりの計画をつくる時は、

大抵、地域代表の人にも委員会に入ってもらおうのが通例になってきました。地域の住まいづくりやまちづくりは行政だけではできないことで、そこに暮らす住民の協力が不可欠だからです。

でも、地域の人に、行政と一緒にまちづくりの計画などの協力してもらうためには、住民自身にもある程度の知識と、何より地域の住まいやまちへの関心を持ってもらわないと、なかなかうまく連携してまちづくり・住まいづくりができませんので、そこで住教育が必要になってきています。

さらに、多くの方に、主体的に地域の住まいづくりやまちづくりに関わってもらうのがいいのですが、大人になってからでは忙しくて、例えば今日のようなシンポジウムにもそうそうは来てもらえませんが、また、来ていただける人が限られてしまいます。それで、子どもの頃から、地域に愛着を持ってもらい、地域の住まいやまちづくりに関心を持ってもらえるよう、将来の地域を支える大人を育てようという考え方がなってきました。

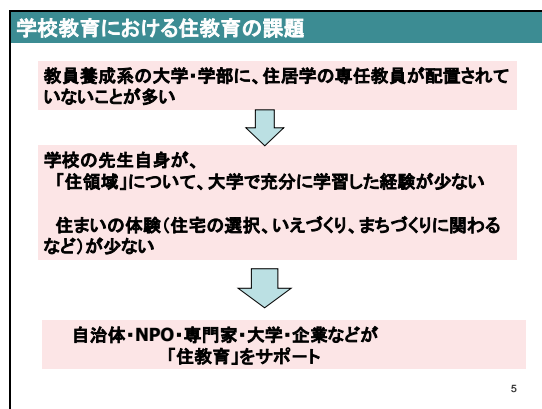


そういった住教育を子どもの頃からするのであれば、学校でやったらいいのではないか、ということになりますが、これがなかなか難しい課題でもあります。

学校教育の中で教科として住まいについて体系的に学ぶのは、家庭科になります。でもこの家庭科は、1989年の学習指導要領の改正前は、中学校・高校では女子生徒だけが学ぶ教科で、男子生徒は中学以降では学びませんでした。ですので、一定年齢以上の大人の男性は小学校でしか家庭科を学んでいなくて、そこで若干住まいについて学ぶぐらいでした。

それから、家庭科は学校で学んだことを、子ども自身が家庭で生活改善したり見直したりすることを狙いとしています。例えば、食生活で野菜の栄養を学んだら、自分の食生活を見直したりすることです。でも、住まいについては、窓を開けて換気する、お掃除するといったこと以外、子ども自身が家庭で実践できることが少ないので、学校の先生から教えるにくいとよく言われます。

また、学校の先生や皆様もそうだと思いますが、家を買う、建てる、改修するという経験はそう何度もあることではありませんので、自分の経験の中から話すということが難しいのです。また、子どもができることがあっても「わが家」の範囲にとどまりがちで、地域の住まいやまちづくりまで話が広がりにくいです。




さらに、もっと根本的なこととなります

が、教員養成系の大学・学部でも、住居学の専任教員がいないところが多いです。福井大学教育地域科学部も家庭科を教える先生のなかにも住居学を教える専任の先生がいません。そうすると、学校の先生になる学生が、住居分野について学ぶ授業科目が少ないので、先生自身が住居について、自信を持てるほどには学んでいないという課題があります。

それで、学校での「住教育」を自治体や、まちづくりのNPO、大学、企業などが、出前授業や体験授業なので、サポートする事例が増えています。

自治体による住教育

北海道北方建築総合研究所



関西では
神戸市住まいの安心支援センター(すまいるネット)
大阪市立住まい情報センター・大阪くらしの今昔館
京都市景観・まちづくりセンター

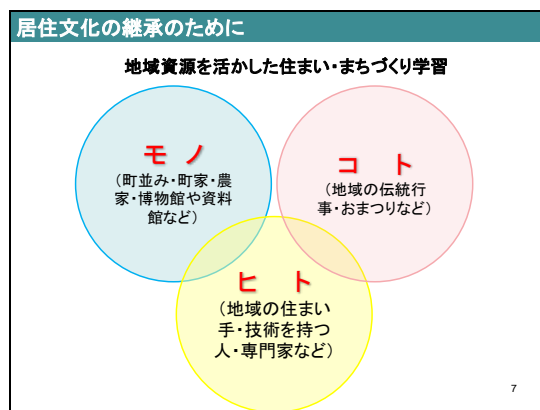
福井県では 福井県土木部建築住宅課

6

その先駆けと言えるものは、北海道旭川にある北方建築総合研究所で、研究所の職員が学校に出前授業をしたり、学校の先生向け講習会をしたり、「ただいま」という住教育テキストをつくってきました。

関西では、阪神・淡路大震災後に開設された、神戸市の「すまいるの安心支援センター」、大阪市の「住まい情報センター」「大阪くらしの今昔館」、京都市の「景観・まちづくりセンター」という、いわゆる住情報センターがあり、子どもや市民向け住教育のサポートに取り組んでいます。

福井県では、建築住宅課が取り組んでいるわけです。



さて、ここから今日の本題に入っていきます。また、ここからは、「教育」、つまり教えるというのではなく、地域の人々、子どもたちが学ぶということを重視して、「住教育」ではなく「住まい・まちづくり学習」と呼びたいと思います。

これからの地域を支えていく子供たちに、地域に愛着を持ってもらい、地域の住まい・まちづくりに関心を持ってもらうためには、私は、「地域の居住文化」を伝えることが重要だと思います。私たちの住まいやまちは突然出てきたものではなく、昔からの歴史や地域の気候風土の中で、長年育まれてきたものです。その居住文化を学ぶための教材としては、一番目として、地域の「モノ」、いわゆるまち並みなどが挙げられます。二番目として、地域の「コト」、いわゆる伝統的行事やまつりが挙げられます。そして最後に、「モノ」や「コト」を結びつける役割として重要な、それらに関わる「ヒト」が挙げられます。

この後は、私の研究事例ですが、地域資源を活用した住まい・まちづくり、そして、そこから学べるものについて紹介します。

モノ（歴史的町並みや町家）と
コト（伝統行事）から学ぶこと

まつりのしつらい

8

最初に、歴史的まち並みや町家「モノ」と伝統行事「コト」を結びつけた一つの事例として、「まつりのしつらい」を見ていただきます。

まつりのしつらい(京都祇園祭り)



私は、1991年からの京都の祇園祭の調査から始まり、その後、地方都市の祭礼調査を継続的に行ってきました。それらは、まつりの空間演出、しつらいを調査するものです。

これは、京都の祇園祭の写真です。祇園祭では、町家の座敷に家宝の屏風が飾られ、住宅内を華やかに演出します。また、町家の外には、幔幕や提灯、まつり簾が飾られ、まつりのまち並みを演出します。

このように、おまつりの「ハレ」の舞台となる住まいも、おまつりのしつらいが施され、これがまつりの住文化の一つだと言えます。

まつりのしつらい(富山県城端曳山祭)



10

こちらは、富山県の城端曳山祭です。越中の小京都と呼ばれる城端では、京都の祇園祭と同様に、町家に幔幕、提灯、祭り簾が飾られ、山宿と呼ばれる神様をお守りするおうちでは、華麗な屏風が座敷の両壁面に飾られます。こういったものは、地域の人たちのなかで、教わるのではなく代々伝わってきた住文化です。

まつりのしつらい(三国祭)



これは、皆様ご存じの三国祭です。三国祭でも、幔幕、提灯、祭り簾が町家の軒を飾り、座敷には屏風を飾って、人形の山車をお迎えします。

まつりのしつらい(小浜放生まつり(放生会))



こちらは、小浜の放生祭ですが、町家の表構えに幔幕と提灯が飾られ、本陣と呼ばれる町内のお飾り場所には、屏風が飾られます。

まつりのしつらい(まつりの住文化)から学ぶこと

まつりは、

一年で最も、まちが華やいでみえるとき
ふだんは接しない地域の人が見えるとき

まつりのしつらいにマニュアルはないが、

子どもが地域の文化を空間として体験し、
地域の大人と接し、文化を伝承してもらえる

13

見ていただいたのはいくつかの事例ですが、伝統的な祭礼行事では、町家やまち並みは、まつりを行うための演出舞台となっています。そして、まつりでは、町家・まち並みが飾りつけられ、一年でもっとも町家やまち並みが華やいで見えるときです。屏風の飾り方、どこにどのような絵の屏風を飾るかなどにマニュアルはないのですが、おまつりの時は、普段は気付かない住文化を肌で感じられる時だと思います。また、子どもたちがまつりに関わる家族や地域の大人と接し、文化を継承しやすい時だと思います。

こうした、おまつりのしつらい、おまつ

りの住文化は、一つの地域資源「コト」であり、それを伝えることが、地域の町家やまち並みを大切にする気持ち、まち並み保存へとつながっていくと考えられます。

町並みや町家を活用した町おこしイベントから学ぶこと



徳島県勝浦町のひなまつり
「おひなさまの奥座敷」(ふれあいの里さかもと)

もう一つの事例として、京都の祇園祭のような伝統的なまつりとは別に、町家やまち並みという地域資源を活用した町おこしイベントとして、近年、「町家のひなまつり」あるいは「まち並みひなめぐり」が増えています。ひなまつりは元来、雛人形をお座敷に飾るものですが、これは徳島県勝浦町の「おひなさまの奥座敷」といい、町家の表構えに雛人形を飾り、まち並みを雛人形で演出している様子です。

私が平成20年度までの時点で、全国のひなまつりイベント型でまちおこしをしているイベントを調べた結果ですが、全国約120か所で行われていました。その中で、開始時期や内容まで分かったのは90か所あまりです。その内訳を見てみますと、多くのイベントが平成10年以降、ここ10年ちょっと前から始まったことが分かります。

人形を飾る場所ですが、資料館や文化財指定の住宅に飾るものを「施設型」、まち並みの中の一般の家に飾る場合を「まち並み型」としますと、平成10年以降に始まっ

たものの多くが「まち並み型」です。イベントに参加している軒数やイベントの主催者を調べますと、人形を飾る軒数が20軒未満のところも多いですが、100軒以上の家がイベントに参加するという事例もあります。また、伝統的なまち並み保存地区よりも、保存地区などに指定されたところではない町で行われることが多いです。

イベントの主催者としては、地域のひなまつり実行委員会や保存会など、地域住民が立ち上げたものが多いことが特色です。

町並みイベントのひな祭り(座敷に飾るタイプ)



その時の雛人形の飾り方を調査しましたが、このような立派な7段飾りを、おばあちゃんの代、お母さんの代、娘さんの代、お孫さんの代、それぞれの雛人形をずらっと並べることが多いです。家の奥の座敷に飾り、見物客を座敷に招いて、お茶やお菓子などでもてなす場合もあります。でも、7段飾りを座敷に飾りお客様を招くというのは家族の負担も多いので、全てができるというのでもありません。

町並みイベントのひな祭り(店先や窓に飾るタイプ)



もう少しお手軽なものになりますと、玄関や店先を開け放して、雛人形を飾ったり窓や格子から見てもらうものも多くみられます。

町並みイベントのひな祭り(軒下などに飾るタイプ)



さらに、もっとお手軽なものになりますと、エアコンの室外機の上に手作り雛人形を置く、軒下のお花のプランターの間にごく、お寺のお知らせケースなどに飾るなどの事例も見られます。7段飾りの雛人形が無くても、こうした簡単な雛飾りでも、皆さんがイベントに参加することができます。

町家や町並みを活用したひな祭りの特色

- ◆雛人形を見ながら、各町家を巡ることで、見物客に町並みの良さを知ってもらうことがポイント
- ◆町家を活用した雛祭りは、住民自身が町家や町並みの価値を認識する(学習する)機会になる
- ◆町並みでの雛祭りイベントは、住民がまちづくりに手軽に参加できる手法
- ◆ひな祭りというソフトを組み入れたまちづくりが、町家の保存や活用にもつながる

20

ひなまつりイベントは、住民自身が手軽にまちづくりに参加できるのが特色です。普段暮らしている町家やデッドストックとなっていた雛人形が陽の目を見る、皆さんに見てもらうことによって、新たな価値を見出すのが特色です。

また、観光客に雛人形だけでなく、それを飾っている町家の空間を見てもらうことで、「このお家はいつ建ったのですか」や、「立派なお家ですね」と言ってもらえると、住民自身が単に古い家だと思っていた自分の家の伝統的な重みに、よそから来た人によって気付かされるわけです。そういう意識が、自分の地域の住まい・まち並みを見直したり保存したりする気持ちにつながっていくのだと思います。

町家を活用したひなまつりが、住民自身が自分たちの町家・まち並みを再認識する、あるいは学習する機会になっています。先ほど述べたように、7段飾りのような立派なものだけでなく、手作りの雛人形でも手軽に参加できますので、ここ10数年でこのようなイベントが多数出てきているのだと思われます。ひなまつりというイベントがソフトなまちづくりとなり、町家やまち並みの保全につながっている事例です。

伝統行事から地域を学ぶ

「つくりものまつり」

21

3つ目の事例は、地域の伝統行事「つくりもの」を活用した学習、これも活用できるのではないかという視点からお話をさせていただきます。

勝山左義長のつくりもの



22

福井県勝山市の左義長祭で見られる「つくりもの」はおまつりのお飾りの一種で、日常生活道具などを使って、人形や動物、干支や縁起物、風刺物などをつくり、見物客を驚かせるものです。写真は卯年の時のもので、鍋を使った兎、大福帳でできた兎などです。



あわら市の金津祭でも、日常生活用品を使ったつくりものが見られます。これは、ナイロンたわしの越前ガニ、漆器で作った鬼瓦、竹ざるや簾で作ったお坊さんです。このように、趣向を凝らしたつくりものが福井県でも見られます。



富山県福岡町の「つくりものまつり」も有名です。福岡町では、カボチャやひょうたん、瓜、芋などの野菜を使ったユニークなつくりものが人目を楽しませます。



福岡町では、小学生もつくりものまつりに参加しています。小学3年生の授業ですが、「つくりもの名人」と呼ばれる地域の人に学校の総合学習の時間に来てもらい、指導してもらっています。「つくりもの」という地域の伝統行事を、地域の人から子どもたちに伝えてもらうものです。

まつりの当日は、小学生が会場にいて、見物客に「つくりもの」の感想を聞く姿も見られます。



関西では、京都府福知山市の額田地区で、同じく野菜を使ったつくりものが見られます。ダイナミックなつくりものが特色です。



ここでも、地域の小学校が総合学習で、地域文化を学ぶ学習としてつくりものをつくり、まつりで作品を展示しています。

つくりもん祭りの共通点

- ★即興性、当座性が重視された題材
- ★祭りが終われば、すぐに取り壊される
- ★地域の素人住民がつくるもの
- ★町内の町家や街路が、つくりものの展示場として利用される
- ★町並みを歩く見物人の目を引き付けることを意識した展示
- ★つくりものを見ながら、見物人が町内をめぐる

28

おまつりにおける「つくりもの」の特色は、町家・まち並みを利用することと、見物人にまち並み全体を回遊してもらう、まちを見直してもらうという効果があります。

つくりもんまつりへの子どもが参加できる背景

- ★つくりものには、造形的な楽しさがある
- ★野菜のつくりものは、材料が手軽に手に入る
- ★地域文化を学ぶ教材として、「総合的な学習の時間」で取り組みやすい
- ★子どもの発達段階に応じて、個人作品も、共同の大型作品も可能

29

つくりものまつりに子どもが参加する背景を考えると、つくりものには造形的な

楽しさがあって、地域文化を学ぶ教材となりやすい特性を持っています。

八尾木の民芸つくりもんまつり

・江戸時代中期にはじまるとされるが、昭和28年に途絶える

・昭和52年に地域の育成会によって復活→
「八尾木民芸つくりもん保存会」が継承

大阪府内で唯一現存している野菜のつくりもの

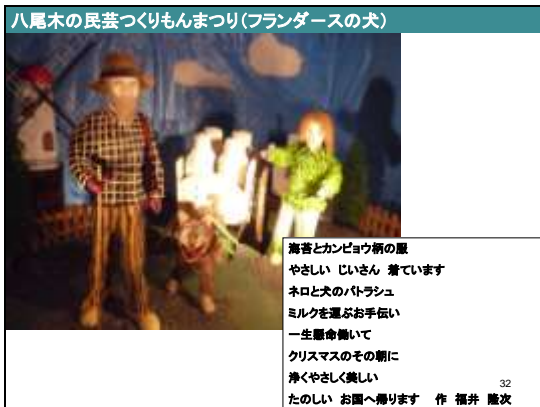
30

大阪市東部にある八尾市の「八尾木」では、「八尾木の民芸つくりもんまつり」があります。江戸時代中期に始まったとされていますが、戦後いったん途絶え、昭和50年代に「八尾木民芸つくりもん保存会」が継承し、今に至っています。大阪では唯一現存している、野菜を使ったつくりものまつりです。毎年10軒ほどの家の倉庫や玄関先に、ユニークな「つくりもの」が飾られます。

八尾木の民芸つくりもんまつり(花さかじいさん)

31

これは、その一つの例で、日本昔話の花咲かじいさんです。おじいさんのモンペはししとうでできていて、おばあさんのモンペはとうがらしでできています。

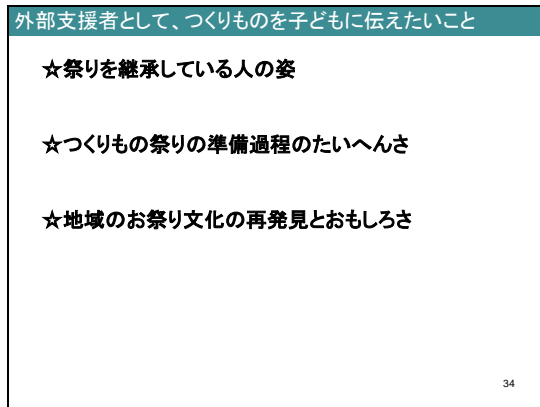


これは、童話のフランダースの犬です。おじいさんが着ているシャツは、海苔とかんぴょうでできています。ネロ（少年）が来ているシャツはししとう、ズボンはねぎでできています。パトラッシュ（犬）はしいたけでできています。



こちらは大河ドラマで大人気だった「篤姫」です。これらのように毎年精巧な野菜のつくりものが作られます。

このつくりものは、昭和50年代に当時の30～40歳代の人たちが一生懸命に復活されたもので、そのまま同じ人たちが引き継いで今に至っています。その保存会のメンバーの多くは70歳代以上の人になり、継承が危ぶまれています。また、民俗学的にも非常に貴重な行事ですが、八尾市でもごく近所の人には知られていません。



そこで、大学が外部支援者として、このまつりを子どもたちに伝えるための学習イベントを考えました。まつりを継承している人の姿、つくりものまつりの準備過程の大変さ、地域のお祭り文化を子どもたちに教えたいため、3年間続けてやっています。



子どものためのつくりもの体験イベントと称し、まずは子どもたちに大学に来てもらってつくりものについて勉強してもらいました。意外と地域を歩いていませんので、子どもたちとまち歩きを行い、つくりもの見学をして、作っている人にいろいろ聞きました。そして保存会の人に来てもらい、実際につくりものを子どもたちが作りました。



これが子どもたちの作品です。野菜を使った虫やお人形ができました。



町内の一角にいただいたブースに、これらを展示し、子どもたちも参加することで、参加した子どもだけでなく両親や祖父母も見に来てくれて、輪が広がっていきます。

子どもの感想から

★実際につくりものを野菜を選んで作るのは難しかった。でも、いろいろ野菜をくっつけたりするのは おもしろかった。このイベントをずっと続けて欲しいと思った

★この野菜で動物をつくったりすることを、一生残していきたいと思った。

38

「実際につくりものを野菜から選んでつくるのは難しかったが面白かったので、このイベントをずっと続けてほしいと思っ

た」や、「野菜で動物をつくったりすることを、一生残していきたいと思った」という子どもたちの感想がありました。

小学校の先生の感想から

★地域独自の取り組みである、つくりもん祭りがより多くの人目に触れ伝統文化について考えるきっかけになるプログラムと感じました。

また、つくり手の工夫やアイデア、手間を考えるとつくりもん祭りに対する見方や考え方も深まりました。

★1日をとおして文化に触れ、体験することでつくりもん祭りを知るといふ人が増えるのは大切なことだと思いました。

39

小学校の先生にも来てもらい、「地域独自の取り組みであるつくりもんまつりがより多くの人目に触れ、伝統文化について考えるきっかけになった」や「1日を通して文化に触れ、体験することで、つくりもんまつりを知るといふ人が増えるのは大切なことだと思いました」などの感想をもらいました。

つくりもの体験イベントは、まつりの保存会の人たちだけではなく手が回らなくてできないことを大学がサポートすることで、地域の伝統行事を子どもたちに受け継いでもらうきっかけづくりということで、少しお役にたったかなと思っています。

**歴史博物館の展示室を活用した
住まい学習**

—住まいと暮らしの文化を学ぶ・伝える—

40


最後になりますが、私が取り組んでいる

住教育関係で、歴史博物館の展示室を活用した住まい学習についてお話しします。

住まいと暮らしの変化の中で・・・

かつては、ごく普通に見られた暮らしの光景の消失

- はたきとほうきを使って掃除
- 障子を貼り替える
- 畳の上で正座して、ごはんを食べる など



日本の住まいや暮らしの文化を
次代の子どもたちに伝える

ずっと昔からあるものが受け継がれてきて、
今の暮らしがあることを認識してもらう

41

目的としては、住まいと暮らしの文化を学び、次の世代に伝えていくということで、今回のシンポジウムの副題と同じ内容です。福井県では歴史博物館の展示室を活用しなくても、地域の中に昔ながらの町家・まち並みが数多く残っていますが、大阪市内ではそういったものはなかなかありません。それで、江戸時代のまち並みを復原した住まいのミュージアムを活用して住まい学習をしようということです。

その背景として、大阪のマンションですと暮らしている子どもたちは特にそうですが、住まいと暮らしが急変していることが挙げられます。家に畳の部屋が一つもないという子どもも珍しくなく、障子やふすまが家に無い、まして床の間なんて無い、全部フローリングで洋式の生活をする子どもが増えてきています。

ほんの少し前までは、ごく普通の暮らしの風景、例えばはたきとほうきを使って掃除をする、障子を貼り替える、畳の上に座ってご飯を食べるということすら無くなってきているわけです。そういった日本の住まいや文化を、次の世代の子どもたちに、一定程度はいくら生活が変わっても伝えて

いかなければならないものがあると思いますし、私たちの暮らしが昔からあるものがずっと受け継がれて発展してきて今に至っていることを認識してもらう必要があると考えています。

大阪市立住まいのミュージアムの常設展示室の教育活用

伝統的工法を用い、実物大で再現した江戸時代の大坂の町並み展示を住教育プログラムに活用

(町会所、茶屋、風呂屋、本屋、長屋、共同便所、通り土間、仕舞屋、踏地、土蔵、火の見櫓など)

戦後復興期のバス住宅

夏祭りの町並み

江戸時代の大坂の町並み

大阪市立住まいのミュージアムは、大阪市北区天神橋6丁目という、地下鉄の駅に直結したビルの中にあります。そこに伝統的構法を用い、実物大で再現した江戸時代の大坂のまち並み展示を持つ歴史博物館です。ここを活用して、昔の大坂の暮らしの文化を子どもたちに体験してもらおうというのが、私が取り組んでいる体験学習イベントです。

来館者各層に対応した学習プログラム

1) 小学校団体向け「昔の暮らし学習」に対応したプログラム

常設展示室の町並み展示とリンクした学習

ホールでの昔の暮らし学習

常設展示室内での学習

4種類の体験学習用ワークシートの開発 (HPからダウンロード)

年間300校、2万人の小中学生が体験 (参考 中学生 年間70校・5000人 高校・大学生4000人)

【研究成果】今年度の小学校団体向け体験学習プログラムの評価 - 小学校教員を対象としたアンケート調査の結果から -、大阪市立住まいのミュージアム研究紀要・年報7

43

小学校3・4年生社会科に「昔の暮らし」の単元があり、大阪の場合は昔の暮らしを学ぶ、実物を見たり手に触れたりということが自分の住んでいるエリアではできませ

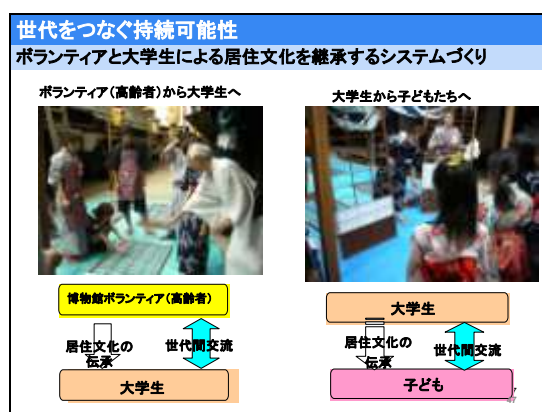
るので、この博物館に来てもらい、昔の暮らしの雰囲気味わってもらっています。住まいのミュージアムでは年間300校、体験学習で1万6千人、体験学習以外の子どもたちも含めると約2万人の小学生が来館します。来館した子どもたちに、床の間、井戸、雪隠（せっちん）、屋根瓦など、昔の住まいや暮らしを体験してもらいます。

一般来館の子ども向けには、土日曜日や夏休みに、まち並みでの大工体験、町家の座敷での昔遊び、建物内での書き初めなど、建築の技術や生活をまち並みの空間の中で体験するプログラムを開発してきました。また、一般来館の子どもたちに和服や半纏を着てもらい、昔の子どもになりきって、子ども自らが町家の住人を演じながら体験する学習プログラムも、夏休みイベントなどで実践してきました。町家に暮らす子どもとして、「昔の住まいと暮らし一日体験」では、町家の箱階段のお掃除をし、障子の貼り替えをし、座敷でお茶を習います。また、子どもあきんど体験では、丁稚さんになって、町家の「ミセノマ」で商売体験をします。こうした子どもたちの自ら演じる体験が、町家の展示に生き生きとしたものに変えるのです。

余談ですが、子どものほとんどが、はたきを使うのが初めてで、はたきを使った掃除が大人気です。



近年、住まいのミュージアムでも、留学生を含む外国人の来館者が増えています。そうした外国人に日本の住居と住生活を知ってもらうために、和服を着てまち並み展示の解説のほか、留学生や外国ルーツの子ども向けイベントとして、町家での書道やお茶の体験、障子貼り体験の学習プログラムを設けています。



ご紹介した学習イベントの多くは、博物館のボランティアさんに手伝っていただいています。また、ボランティアだけでなく、大学生も加わっています。ボランティアさんは70歳前後の方が多く、子どもには世代差があまりにも大きいため、子どもの生活感やイメージから離れてしまいます。そこで、大学生に参加してもらうことによって、ボランティアから大学生へ障子貼りや大工仕事などの技術を指導してもらい、そ

れを今度は大学生が先生役になって子どもたちに教えることによって、居住文化の伝達と世代間交流を図っています。つまり、高齢者、大学生、子どもへと、世代をつなぐ持続可能なシステムを目指しています。

「ボランティアさんと一緒に企画を進めていると、人生経験にかなうものはないと実感しました」や「着付けにしても障子貼りなどにしても、知識量が違って人間の蓄積はすごいもんやと思いました」と大学生が感想を述べています。大学生には、建築・住教育の学習の場として活用のほか、自らスタッフとして活動して学ぶ機会を作っています。



最後にこれはおまけですが、住まいのミュージアムでは毎年8月に、江戸時代のまち並みで肝試しをしています。この仕事は体力がいるので、学生たちが参加し、お化け役をしています。背景には、電気がなかった真っ暗な夜の恐ろしさを体験するという意味で、肝試しも一つの学習だと思っています。

地域資源を活かした住まい・まちづくり学習

地域資源と人材が豊富な福井県

○地域の歴史資源が豊富

○地域で昔から暮らしている、地域をよく知る人材が豊富

○地域の人が先生役になって、地域の子どもたちに、地域の資源を使った住まい・まちづくり学習を行いやすい

○教える大人も、地域を見直すことにつながる

49

以上、住まい・まちづくり学習のための地域資源には、まち並み、町家、おまつり、伝統行事、そしてそこにいろいろな人が関わっているということがあります。

福井県は地域資源と人材が非常に豊富であると私は思います。住まいのミュージアムのようなつくられたものではなく、本物の昔ながらの住まいやまち並みが残っているところが多く、昔からそこに住む地域の人たちがたくさんおられます。だから、大都会とは違って、地域の人たちが先生役となって、地域の子どもたちに地域の町家・まち並みといった地域資源を活用した住まい・まちづくり学習を行いやすいと思います。また、教える側の人も地域を見直すことになります。

その具体的な事例については、この後のパネルディスカッションでお聞かせいただくことを楽しみにして、私の話を終えたいと思います。

どうもありがとうございました。

パネルディスカッション

出演者

コーディネーター	五十嵐 啓
コメンテーター	碓田 智子
パネリスト	小川 利男
	朝倉 英俊
	石畝 正樹
	高島 信義
事務局	坂川 慶介



《事務局 坂川》

ただ今より第二部のパネルディスカッションを開催いたします。本日は、住教育やまちづくりに携わっている4名の方を交えまして、パネルディスカッションを行います。

出演者の方を順番にご紹介いたします。

コーディネーターを務めていただきますのは、福井工業大学の五十嵐啓先生です。五十嵐先生は、大手建設会社の設計部で数多くの建築物を設計され、現在は福井工業大学で建築計画や意匠設計等について、教鞭を執られています。

コメンテーターを務めていただきますのは、先ほど基調講演をしていただきました大阪教育大学の碓田智子先生です。

次に4名のパネリストをご紹介します。

福井県建築士会南越支部の小川利男様です。小川様は建築士会をはじめ、武生ルネサンス、武生立葵会などにも参画し、郷土の歴史や文化を継承するために幅広く活動されています。

つづきまして、NPO 法人今庄旅籠塾事務局長の朝倉英俊様です。朝倉様は、まち並みや文化を保全するため、今庄地区におきまして住民主体の自立したまちづくりを目指し活動されています。

つづきまして、福井県建築士会勝山支部の石畝正樹様です。石畝様は、勝山青年会議所理事長や勝山市エコミュージアム協議会会長を歴任するなど、地域に根差したまちづくり活動をされています。

最後に、たちまち子ども文楽団長の高島信義様です。高島様は、今年の3月まで立待公民館の館長を務め、今年の6月からはたちまち子ども文楽を発足するなど、近松の里七曲り地区で積極的に活動をされています。

それでは五十嵐先生、よろしくお願いたします。

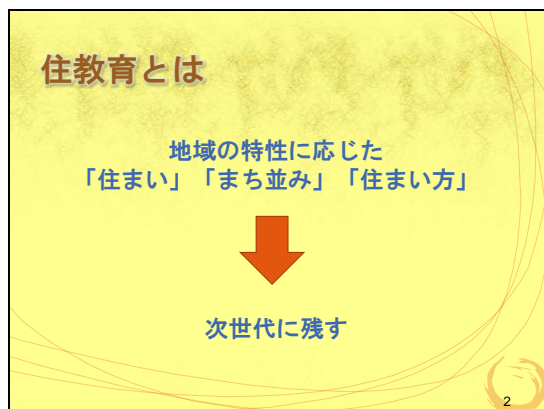
《コーディネーター 五十嵐》

みなさまこんにちは。ご来場いただきありがとうございます。

私は、福井工業大学で建築を教えますが、まちづくりにはどちらかというと素人です。本日はパネリストの方々に現在取り組まれている活動を紹介していただいた後に、会場にお越しいただいた皆様を交えた意見交換ができればと思っています。

まずは、福井県内で平成23年度から取り組んでいる住教育の内容について、福井

県の担当者から説明をいただきたいと思
います。



《事務局 坂川》

福井県において住教育でどのような取組
をしているかについて、最初に説明させて
いただきます。住教育シンポジウム「みん
なで考えよう！ふくいに住まい方」とい
うテーマですが、大事なことはサブテー
マである「次世代につなぐ ふくいの住
まい、まち並み、住まい方」です。「住
まい」とは建物単体のことで、「まち並
み」とは建物が連担している状態です。
住まいやまち並みは簡単にできるもの
ではなく、日々の暮らしということ、「住
まい方」になります。

次世代の子や孫にこういったものを残
していくのが大事です。「住まい」「ま
ち並み」「住まい方」を、「住環境」とも
言いますが、住環境をみんなで良くし
よう、身近なところから良くしよう、
という取り組みが住教育です。



福井県では平成23年度から取り組んで
おり、平成23年度から平成24年度の2
箇年で福井市日新地区、敦賀市舟溜り
地区、越前市タンス町界隈、南越前町
今庄宿の4地区を、平成24年度から平
成25年度の2箇年で、大野市大野地
区、勝山市片瀬地区、鯖江市吉江地
区、坂井市東十郷地区の4地区をモ
デル地区として住教育に取り組んでい
ます。スライドで赤字になっている地
区は、パネリストとして参加いただい
ている方の地区です。本日お越しのパ
ネリストの地区以外の地区について説
明させていただきます。



まず福井市日新地区ですが、ここにい
らっしゃる五十嵐先生にご協力いただき
、学生さんに発表してもらい、地区の
方と意見交換を行いました。境界領域
というテーマで発表してもらいましたが
、スライドは「ま

ちの縁側」ということで、住まいと地域を縁側でつなげるという提案が一例としてありました。

敦賀市舟溜り地区



5

つづきまして敦賀市舟溜り地区ですが、敦賀市立博物館の横の土蔵を壊すのがもったいない、地域資源だということで、移築をしているところです。道路にレールを敷いて移動させている様子を、敦賀市立博物館の館長や敦賀市の担当者と一緒に、地元の小学生に対して出前講座を行いました。

大野市大野地区



6

つづきまして大野市大野地区、こちらは
大野市の街中になりますが、空き家や空き地があり、このまま放っておくとまち並みが崩れてしまうということで、工夫をして空き家や空き地を活用したまち並みづくりの提案を、福井大学の野嶋先生に協力をいただき、学生さんが地域の方に提案をしました。

坂井市東十郷地区



7

最後に坂井市東十郷地区ですが、こちらは農村風景のあるところです。日頃生活していて気づかないところを、まち歩きを行って地域の良いところを見つけるということを行いました。

本物体験講座

- 平成24年度実施校

鯖江市立豊小学校 (6月13日)
坂井市立東十郷小学校 (6月22日)
大野市立有終西小学校 (11月14日)
勝山市立成器南小学校 (11月21日)

8

モデル地区でのワークショップ以外に、本物体験講座を行いました。木の良さ、木の文化、宮大工の技術などを子どもたちに伝えるために、小学校に出向き、出前講座を行いました。本年度2校ですでに実施し、今後2校を予定しています。

本物体験講座



9

こちらはその時の様子です。真ん中の青い服を着て指導している方が、宮大工の直井光男さんです。伝統的構法で用いられる木組みの模型を、子どもたちに実際に触ってもらいました。

本物体験講座



10

こちらは、直井さんが持っている道具を展示・説明しているところです。

本物体験講座



11

こちらは、子どもたちと一緒に檜カンナ掛けをしているところです。実際にカンナ

掛けを体験することで、子どもたちは目を輝かせて、本物の大工道具や大工技術に触れていました。先ほど碓田先生の話でもありましたように、子どもたちが手を使って、体を使って体験することが大事だと考えます。

以上が、福井県が取り組んでいる住教育の内容です。

パネルディスカッション

- コーディネーター 五十嵐 啓
- コメンテーター 碓田 智子
- パネリスト 小川 利男
朝倉 英俊
石畝 正樹
高島 信義

12

《コーディネーター 五十嵐》

ありがとうございました。それでは、モデル地区として住教育に取り組んでいる8地区の中から4地区の方々にパネリストとしてお越しいただきました。それぞれの活動の内容を紹介していただきます。お一人あたり10分程度でお願いしたいと思います。

まずは小川様、お願いいたします。



《パネリスト 小川》

建築士会南越支部の小川です。

表題には「越前市タンス町界隈」となっておりますが、私も建築士会南越支部ではもう少し幅広く、越前市全体を対象としたまちづくり活動を行っています。タンス町界隈というのは、武生駅の西側に位置するまち並みの一角です。



左の写真は、戦後間もない頃の航空写真です。良く見ていただきますと、道の真ん中にまだ松並木と用水路が残っています。右の地図は、明治8年の市街地図です。この2つを比べますと、ぴったり重なります。ですから、幕末から戦後、現在までと言ってもいいのですが、道筋などが全然変わらずに古いまちがそのまま残っています。



こちらはタンス町に隣接する地区でして、一番右側の建物は卯建つのある幕末の建築ではないかと思われる立派な建物です。隣の建物にはオレンジ色のテントが付いていますが、これを取り外すと武生のまち並みにふさわしいものが出てきます。

このように、歴史的資源が残っている地区になります。



左側の地図は、300年前の地図です。この300年前の地図を持って今でもまち歩きができるという、武生は非常に稀有なまちです。



平成10年から、建築士会南越支部は色々な活動をしておりますが、大枠についてお話ししたいと思います。大体4つほど大きな事業があります。

赤字で①と書いてありますが、まち並み調査をしました。旧市街に残ります町家を1軒1軒調査し、約4000軒の悉皆調査をし、1軒ずつ表構えを写真に撮り、調査票に記入しました。武生にはどこに、どれだけ、どんな建物が残っているか、ということ进行调查しました。これにより、武生にはいい建物がたくさんある、そしてそれにまつわる物語がたくさんあることを実感しました。

大変な調査でしたので、私どもだけではとてもできませんので、福井大学・福井工業大学・武生工業高校・武生ルネサンスと協力して調査をしました。そしてその調査の段取り役を建築士会南越支部が行いました。



次に②として、平成19年に「全国都市再生モデル調査事業」がありました。先進的な取組をしているところに国土交通省が補助金を出して応援するという事業です。全国で約500件の応募があったそうですが、採択された150件のうちの1件として建築士会南越支部の事業が採択されました。

「粋なまち暮らしを楽しむ」を統一テーマとして、福井大学・仁愛大学・武生ルネサンス・建築士会南越支部の4つの団体が協働でいろいろな提案を行いました。

福井大学の学生さんは、実際の町家を借り受けて、そこを改修して、「このように住むと楽しいよ」という提案をしました。

仁愛大学の学生さんには、「街の中に人を呼ぶにはどうしたらいいか」とのテーマで、まち歩きのイベントやお寺の境内で喫茶店をするというイベントなどをしてもらいました。

武生ルネサンスでは、武生の街中の建物が壊され駐車場にされてしまう例がたくさんあり、その駐車場があまりにも殺風景なので、「武生の古い町にふさわしいもみじを植えよう」と駐車場の空きスペースを地主と交渉し、もみじを植えていきました。15～16本植え、今でも元気に根付いてい

ます。もみじを植えることで、「なかなかいいもんだな」「自分たちの駐車場にも1本植えようか」という機運が出てきました。

建築士会南越支部では、「親子でまち暮らし楽しむ」というテーマで懸賞設計をしました。親世代が商売をやめると、子がいるところへ移り住んでしまう、街中の町家が空き家になって駐車場になってしまう、という悪循環ではなく、街中で三世代で住むことはすばらしいことではないかということで、タンス町の近所の実際の町家をモデルにして、県内の建築士に声をかけ、懸賞設計をしました。ここにいらっしゃる五十嵐先生の「ゼロの会」が最優秀賞になり、他優秀賞を2つ選びました。

次に③として、まちづくりから少し離れるのですが、せっかくコンペでいい作品が出てきたので無駄にしたくないという思いから、「工業高校の学生さんに出前授業をしてはどうか」と考え、コンペの入賞者3名にお願いして、「町家はどんなものであるか、そしてそれを改修するとこんなにすばらしいものになるよ、またそれを改修するにはこんないい方法があるよ」ということを、武生工業高校・敦賀工業高校・福井工業高等専門学校・福井工業大学で出前授業をしました。町家を全然知らない学生さんから、「町家って面白いな」「町家に住んでみたいな」という意見がたくさんでした。

「授業もいいけど実際の現場も学生さんに見せたいな」と思い、次のステップとして、山を見て、製材所を見て、大工さんの加工場を見て、建前の終わった建物を見て、できあがった建物を見てという一連の流れを、バス3台チャーターして武生工業高校・敦賀工業高校・福井工業高等専門学校

の学生さんに一日で回ってもらうイベントを開催しました。「実際の現場を見られて良かった」という意見をいただきました。

ところが、ここまでの活動は学生さんにとって受け身の活動なので、学生さんが主役になる活動をしてもらえないかという思いが出てきました。ちょうどそのころ、今庄旅籠塾で実際の旅籠を改修し、それを活かしたまち並みづくりをするという話が出ていましたので、今庄旅籠塾と連携して学生さんに実際の改修の提案をしてもらう橋渡しをし、改修コンペが行われました。

その延長として、武生のタンス町が、職人の町としてどんな建物が建っていると良いかについて、工業高校の学生さんに懸賞設計をしてもらいました。それでもって建築士会連合会主催の建築甲子園に出場し、奨励賞を取られました。

最後になりますが、④として、昨年、古地図散歩を行いました。この古地図散歩は、NHKで非常に好評の「プラタモリ」という番組がありますが、その武生版です。古い地図を見ながら、その痕跡が今に残ることを見て回りました。昨年は、武生に現存する最古の地図ができてからちょうど300年ということで、越前市教育委員会が古地図展を行いましたので、協賛してやろうということになりました。これは、郷土史の同好会の集まりである武生立葵会と共催で行い、越前市内外から250名ほどの方が参加されました。

以上が、平成10年から建築士会南越支部が行ってきた主な活動内容ですが、建築士会だけでなくいろいろな団体と協働しながら、活動の輪を拡げることができたということが我々の活動の特徴だと思います。

以上です。

《コーディネーター 五十嵐》

ありがとうございました。続きまして、朝倉様お願いいたします。



《パネリスト 朝倉》

今庄旅籠塾の朝倉です。

まず今庄の地域ですが、この写真のように四方を山に囲まれた、山間の小さな町です。しかし、古来より北陸道あるいは北国街道が通り、越前への入り口として非常に重要な地でありました。現在も北陸本線をはじめ、高速道路など交通の要衝となっています。



この写真は、今庄の街中の現在の写真ですが、道路は昔の北国街道そのままです。町割りや家々が残っていて、宿場町の風情

が残っています。



今庄宿の中にも江戸時代の建物が数軒残っていて、この写真は「羽根曾踊り」という昔から残る踊りの風景ですが、後ろに写っているのは「京藤甚五郎家」という、水戸の浪士が泊まったといわれる江戸時代末期の建物です。こういった建物のあるまち並みが残っているわけですが、残念ながら今庄は過疎化が進んでいて、空き家となった建物が管理ができないということで取り壊されて、空き地が目立つようになってきました。

このままでは空き地ばかりになり、まち並みという景観が壊れる、さらには今庄という町が無くなってしまわないかという危機感から、平成21年4月に当初5名によって「今庄旅籠塾」が結成され、平成22年8月にNPO法人化をしました。現在は、会員が24名、賛助会員が30名で活動を行っています。

南越前町今庄宿



22

われわれが活動を始めた矢先に、この江戸末期の建物「旧旅籠若狭屋」の持ち主さんが壊すという話がありました。この建物を何とか残したいということで、ご理解をいただきお借りすることができまして、ここを今庄旅籠塾の拠点とすることになりました。

先ほど建築士会南越支部の小川さんから説明をいただいたところですが、武生工業高校や敦賀工業高校の授業の一環として、この若狭屋をどう改修したらいいのかというプランを出してもらい、そのプランに乗っ取ってわれわれが改修工事を行っていくということをしてきました。

南越前町今庄宿



23

この写真は、今庄旅籠塾の会員やボランティアで中を改装しているところとして、元々旅籠ですから、入ったところに土間があったというのが分かっておりましたので、

あるいはコンペで最優秀を取った学生さんの作品も土間にしていましたので、そのプランを進めていきました。

南越前町今庄宿



24

この改修工事はこの後も徐々にやっているわけですが、特に敦賀工業高校の学生さんが改修工事の実習ということで、毎年夏休みを利用して1泊2日で改修工事の体験授業をやらせてもらっています。この写真は土間の三和土（たたき）作業といいます。

土をこね、石灰を混ぜ、昔ながらの方法でたたきながら土間をつくっていく実習授業をしています。今年はこのほかに、足場の体験実習や、若狭屋で宿泊するという体験をやらせてもらっています。

われわれは、この若狭屋の改修工事をしたうえで、旅行者の方々や住民の方々がふらっと立ち寄れるサロンのようなところになりたいと考えています。また、若狭屋の中で毎月2回例会を開催していろいろな諸問題について話し合っております。



われわれはまちづくりやまち並み保存を主な目的として活動していますが、この他にも、今庄は歴史の宝庫なので、住民の方に歴史を再認識してほしい、今庄という歴史ある町を自信に、誇りに思ってもらいたいということから、今庄旅籠塾独自の歴史講座を開講しています。写真は今年の3月に行った歴史講座のポスターですが、今庄には燧ヶ城という源平の古戦場がありまして、その他にも木ノ芽峠城塞群という貴重な場所があります。こういった場所に関して、元福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館長の青木先生に講演いただきました。



このほかにも、特に今年は福井県建築住宅課とのタイアップとして、いわゆる住教育の中で行灯づくりを行いました。今庄では、9月の第3日曜日に「街道浪漫今庄宿」というイベントがあるのですが、その前夜

祭に華を添えようということで実施をしました。



出来上がった行灯を、このように若狭屋の前に並べますと非常に雰囲気がよく、風情が味わえたので、来年も行灯を増やしていきたいと思っています。



同じく住教育ということで、8月に福井市日新地区の住民の方々が今庄宿にやってきて、若狭屋にて講演をさせてもらった写真です。福井市内ということで、今庄とどういところが違うかを子どもたちに、住宅の違い、あるいは生活の違い、例えばコンビニが何軒ありますかという話をさせてもらい、「今庄にはコンビニが1軒しかない」という話をすると子どもたちはびっくりするとか、「生活の中でどこへ行くにも車で行くしかなく、近くにファミレスも無いんだよ」という話をすると、生活環境が違

うということに驚いていました。

このように今庄旅籠塾では、基本的にまち並み保存やまちづくりをメインに行う団体ですが、次の世代を育てるということでもいろいろな教育支援事業を行っています。

以上です。

《コーディネーター 五十嵐》

ありがとうございました。続きまして、石畝様お願いします。



《パネリスト 石畝》

福井県建築士会勝山支部の石畝です。

まず片瀬地区の紹介をいたします。片瀬地区は勝山市の東に広がる、農業の盛んな地域です。大野市の上庄里芋は全国区になっていますが、片瀬の里芋もちっとしていてとてもおいしいです。また、勝山水菜などもあります。



「大師山清大寺」というとあまり聞きなれないかと思いますが、高さ17メートルの日本最大級の大仏「越前大仏」のある地区でもあります。写真は大仏殿の雪景色の様子です。



勝山市は、2007年にアメリカの経済誌「フォーブス」にて世界で9番目にクリーンな都市として評価されました。そして、エコミュージアムによるまちづくりを推進しています。勝山市のエコミュージアムとは、勝山全体を屋根のない博物館、街は丸ごと博物館として捉え、歴史遺産、産業遺産、自然遺産を保存し、整備し、活用するためのまちづくりの手法です。

写真は、福井ふるさと百景にもなっています、左義長まつりの様子です。これは下袋田区のもので、短冊が4色ありお囃子が一番遅い地域です。

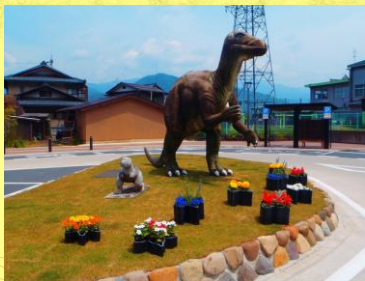
勝山市片瀬地区



32

勝山というと恐竜のまちということで、皆さんご存じかと思います。写真は、恐竜の足跡のプランターを作っているところです。婦人会の方と作っているところですが、女性の方でも簡単に作ることができます。このプランターを街角や各家庭の玄関先に置いてもらえるといいかなということで、作成しました。

勝山市片瀬地区



33

婦人会で作ってもらったプランターを、駅前の恐竜モニュメントの場所に設置しました。プランターは作る楽しみもありますが、そこに花を植えると美しいものです。花は水をやるなど、毎日世話をしないとイケません。また、花が嫌いだという人はいないと思います。花でまちを飾ることができますし、コミュニティの形成にも一役買っているかと思います。

勝山市片瀬地区



34

この写真は、後ろに恐竜博物館と恐竜のモニュメントが見えますが、恐竜の足跡のプランターの底を取って、雪で足跡の形を作るという事業をしているところです。園児の雪遊びに使ってほしいと思い、勝山市の各保育園や幼稚園にこのプランターをお配りしました。勝山に来たら、なぜか分からないが雪でできた恐竜の足跡がある、何だろうなと思ったら子どもたちが恐竜の足跡プランターを使って遊んでいる、そのような情景になっていくといいなと思います。

勝山市片瀬地区



35

勝山は「里地・里山」ということで、竹が手に入りやすく、身近な素材の一つです。竹は切り出しやすく、加工もしやすいということで、建築士会勝山支部と片瀬地区の地元の人たちとプランターを作ろうということになりました。

勝山市片瀬地区



36

親子で参加してもらっていますが、子どもさんにも簡単に作ってもらうことができます。親子で竹プランターを作ってもらうことをテーマにしましたが、竹は長いので余る部分もあります。じっくり見てみると、余った竹で一輪挿しを作ったり、竹を細かく輪切りにしてアクセサリーにしたりと、いろいろなものにチャレンジしていました。創造性を掻き立てる素材でもあるのかなと感じました。

実際、他の事業ですが、親子キャンプをする時に「皿も箸も用意しなくていいです。竹を用意します。」といったことがあります。竹筒でごはんを炊き、竹でスプーンや箸を作り、自分たちが寝るテントも竹で作るということをしたことがあります。竹は応用性がありますので、キャンプの時も夜遅くまで竹細工をしているお父さんがいましたので、今回のプランターづくりでも熱心にいろいろ作るだろうなあと感じていましたら、案の定、プランター以外にもいろいろなものを作っていました。

勝山市片瀬地区



37

竹プランターを作った後、みんなで記念撮影をしました。今後も建築士会勝山支部で活動していきたいと思います。

勝山市片瀬地区



38

作った竹のプランターの一部を、交流を兼ねて今庄宿へ持って行きました。見ての通り、自然素材でできたプランターがまち並みにマッチしています。プランターを各地域にプレゼントすることで、交流を図ることができますし、この写真を見ると勝山ももっと頑張らないといけないと思いますし、竹プランターは日本の民家にあうものだなと改めて感じます。

以上です。

《コーディネーター 五十嵐》

ありがとうございました。続きまして、高島様お願いいたします。



《パネリスト 高島》

鯖江市吉江地区の高島です。

吉江地区は鯖江市の北部に位置し、福井市の南部と隣接している、人口8千数百名の地域です。この地域は皆さんご存知の通り、近松門左衛門が幼年期を過ごした地域です。吉江藩は福井藩の分藩として約370年前に設けられ、約30年続いて廃藩となりました。近松門左衛門の父が吉江藩の藩士として赴任しましたので、近松門左衛門の文化の継承と、近松門左衛門を核としたまちづくりをしています。まちづくり活動の最大の目標は、地域の歴史と文化に誇りを持ってもらうことですが、眼鏡産業が盛んなところですので、働くことに忙しくて文化に親しむ機会が少ないということで、地域の文化力の向上を図ることを一つの理念として活動をしてきています。



当時の姿を見ることはできませんが、吉江藩の遺構として城下町の七つに曲がった通りが現存しています。道路は、国土交通省のまちづくり交付金事業を活用し、石畳舗装されました。



具体的にどのような活動をしているかについて説明します。近松と言えば人形浄瑠璃ですので、平成17年に鯖江人形浄瑠璃「近松座」を発足しました。写真は「傾城阿波鳴門巡礼歌の段（けいせいあわのなるとじゅんれいうたのだん）」の公演の様子です。



今年で15回目を迎えた近松まつりでの公演の様子です。鯖江人形浄瑠璃「近松座」という名前にもかかわらず、今までは近松作品以外を公演していましたが、近松作品が無いと名前倒れになってしまうということで、今年初めて近松作品を公演したとこ

ろです。



今年6月に発足した「たちまち子ども文楽」の初公演の時の写真です。こちらも、近松まつりで披露されました。鯖江人形浄瑠璃「近松座」は17名の大人で立ち上げましたが、近い将来、子どもによる文楽を立ち上げたいという悲願が達成されました。



吉江藩の遺構である七曲り通り沿いが伝統的民家群保存活用推進地区の指定を受けたこともあり、まずは七曲り通りに手作りの行灯を作って設置し、まち並みの風情を演出し、まち並みへの関心を持ってもらうようにしました。



行灯を設置したところです。この場所は、江戸末期から明治、大正期の雰囲気を残した建物が集中的に現存している地域です。鯖江市内でもこのように数軒残っている場所は珍しいかと思います。



行灯を設置したのは、今年で10回目を迎えた「立待月観月の夕べ」というイベントの時です。行灯を設置することで、このイベントをさらに盛り上げることができました。

もう少し時間がありますので、まちづくり活動の流れをお話しします。

最初のまちづくり活動は昭和53年に遡ります。その時に立待公民館の前庭に近松門左衛門記念碑庭園を整備し、文学碑を建立しました。近松門左衛門の命日である近松忌に合わせて、俳句大会をしています。芸術に触れ文化力を向上するために、県外

の人形浄瑠璃劇団の招へい事業として、一流の劇を見てもらう活動もしています。近松文学散歩、大阪国立文楽劇場での鑑賞、近松文学公演会、近松文学講座などを、年数回開催しております。

まちづくり活動がこれからずっと継続していくためには、草創期には行政機関としての公民館が全てお膳立てしましたが、これからは住民が中心となってまちづくり活動をすることが大事です。公民館は仕掛け人は務めますがあくまで黒子に徹し、住民が主役である活動をおこなっていきたいと思います。

以上です。

《コーディネーター 五十嵐》

4人のパネリストの方々ありがとうございました。皆様の活動が多岐にわたること、また大変ご苦労されているということが、皆様のお話でよく分かりました。

残された時間はあまりありませんが、せっかくですので皆様のお話をお聞きしたいと思います。先ほどの碓田先生のお話にも、多くの方が参加して初めてまちづくりという話がありましたが、皆様の発表を聞けば聞くほど、様々な苦労をされていること、自分が参加するにはハードルが高そうだというのが実感です。これから多くの方にまちづくりに参加していただく、次の世代につないでいくということが非常に大事なことだと思いますが、まず、まちづくりに携わっている皆様は、なぜそこまでボランティア的にまちづくりに参加しているのでしょうか。

《パネリスト 小川》

私は武生の町のだ真ん中に住んでいます。ドーナツ化現象の真っただ中にいます。統計によりますと、ここ10年間で武生の旧市街地から約200軒のお店が無くなっているそうです。1年に20軒ずつ無くなっているのです。お店を辞めてもそこに住んでくれればいいのですが、住まいごと郊外に行ってしまうのです。

それは結局、武生の街中に住まう魅力がないという認識で出て行かれるのだと思うのですが、まち並み調査や古地図散歩をしていますと、武生の街中には本当にわくわくするような物語がたくさんあります。それを地域の皆さんに本当に理解していただきたい、知っていただきたい、そのわくわく感を共有したい、ただその一言かなと思います。

《パネリスト 朝倉》

簡単に言うと「今庄愛」です。やはり自分の住んでいる町に対する愛情があってこそ、町の魅力が分かって、この町を残したい、まち並み・景観が段々消えていくことの寂しさという気持ちが出てくるのだと思います。我々の活動も、皆さんが今庄愛を持って活動しておりますので、五十嵐先生の話にありました「ボランティアでなぜここまで」というのは、やはりそこにあるのかなぁと思います。

《パネリスト 石畝》

私は左義長が大好きなんです。一年中お囃子が頭の中に流れているぐらい好きなんです。恐竜も大好きなんです。仕事柄、ホームセンターへよく行くのですが、畔ガー

ドを触っていた時に、うまくすれば恐竜の足跡になるんじゃないかと思って買って帰って、家をつくったら恐竜の足跡になったんですね。

勝山市はエコミュージアム協議会という、市民でつくっている団体があるのですが、平成23～24年の2年間で実に21の団体が新しい事業をしたいと申請が出てきています。まちづくりに関して自分たちもやっていきたいという機運が出てきているのは、エコミュージアムの成果かなと思います。今までは、「勝山なんて」とか「勝山は何もない」という意識が多かったのですが、勝山の魅力的な素材とか個性に気付いただけでなく、自信につながってきているのではないかと感じます。

昨年から、環境保全推進コーディネーターの前園先生が奄美大島から勝山に移り住んでいらっしゃるんですが、その先生は全国で初めて、赤とんぼが里地の田んぼから高原に移動してまた戻ってくるということを勝山で実証しました。実は赤とんぼという種類のとんぼはいなくて、ナツアカネ、アキアカネ、ノシメトンボという名前なんですけど、とんぼ一つとっても勝山はとんぼの町でなんとかなるんじゃないかと気づかせてくれる人がいるというのもあるのかなぁと思います。

《パネリスト 高島》

先ほどの活動紹介の中でご説明すべきことがまだありましたので、ここで話させていただきます。

七曲り通りに行灯を並べて、立待月観月の夕べで雰囲気盛り上げるということで、情緒たっぷりの写真がありましたけど、その

観月会は数軒残っている古民家を開放してもらい、そこを会場として開催をしておりました。居住文化を学ぶ取組として行いました。

先ほども話ししましたように、せっかく近松という貴重な文化遺産がありますので、これを活用したまちづくりを何としても実現したいということで、区長会をはじめ各種団体の総力戦で取り組み、みんなが実行委員だという認識を持ってもらうために総参加で行いました。また、将来の担い手として子ども近松の文化に親しんでもらって、継承してもらいたいということで、学校と公民館と地域が連携して、子ども文楽を立ち上げました。子どもが来れば保護者も来る、祖父母も来るということで、観客の動員数にもつながりますし、理解の輪が広がることになります。

地域の文化力をなんとしても向上したい、近松という文化遺産を活かしたまちづくりをしたいということでやってきました。

《コーディネーター 五十嵐》

ありがとうございます。郷土に対する皆様の愛情がひしひしと感じられました。

もう一つお聞きしたいのは、今進められている活動を次の世代に広げていくために、いろいろなご苦労があると思います。高島様がおっしゃったように子どもさんを引き込めば、親御さんを、さらに地区全体に広がっていくということでしたが、小川様は具体的に運動を広げていく方策はお持ちでしょうか。

《パネリスト 小川》

先ほども発表しましたが、工業高校等へ

の教育支援というのは、単なる教育支援ではなく建築士会の活動の継承をしてほしいという思いがありました。次の世代の建築を担う学生さんに、われわれの活動の継承をしてもらいたいというのが一つです。

もう一つが、碓田先生の話にもありましたように、もっと若い小学校・中学校の子どもたちに郷土のわくわく感をどのように伝えるかということですが、実は明日、私も所属している武生立葵会が市内のジュニアに向けての巡見を行います。これは春秋で2回している、子どもを中心としたぶらりツアーです。子どもさんのためと言いながら、大人の方、それも高齢者の方がたくさん参加されますが、それはそれでいいのかなと思っております。

《コーディネーター 五十嵐》

ありがとうございます。時間があまりありませんので、他の方でもし、こういう活動やっているんだということがありましたら、ご発表ください。

《パネリスト 朝倉》

今庄旅籠塾の場合は、教育支援で高校生のお話をしましたが、地元の小学生が授業で若狭屋にやってきて今庄の歴史を話させてもらったり、中学生にも同じようにさせてもらっています。

そのほかに、小学生の間にまち並みを目に焼き付けてほしいなということから、まち並み絵画展を企画しまして、小学校5・6年生にまち並みを描いてもらい、作品は街道浪漫今庄宿というイベントで表彰しています。町長賞、教育長賞など、町にもお願いし、6つの賞があります。絵画展を通

じて子どもたちにまち並みを印象付けるとのこともしています。

《パネリスト 石畝》

事業を行うときは必ず親子でということがキーとなっています。また、面白い切り口というのが必要になってくると思います。

実は私が今持っていますこの恐竜の模型は、にわたりの骨で作っています。鳥類の祖先が恐竜であるということは学術的にも定説になっています。だったら、にわたりの骨で恐竜ができるのではないかとということで作ってみると、できるんですね。この恐竜の模型をみんなでやってもらうことで、興味を持ってもらえますし、恐竜のまちとして発信する上でいいのかなと思います。

《事務局 坂川》

県の立場というわけではないのですが、まちづくりの活動に子どもの頃から後継者育成として参加するのは大事なことだと思いますが、実際のところなかなかまちづくりに参加するということがエネルギーがいることだと思います。もっと身近な家庭の中でお子さんと親が、例えば雛人形や五月人形など日本古来からある年中行事を家族と一緒にやるということも重要なことではないかと思います。

《コーディネーター 五十嵐》

ありがとうございます。大変残念ですがそろそろ時間となってしまったので、最後、碓田先生に講評ということで言葉をいただきたいと思います。先生よろしくお願いたします。

《コメンテーター 碓田》

皆様方の話を伺いまして、大変勉強させていただきました。何よりも、皆様の地域への熱い思いと愛情が並々ならぬものであるということをお話の中でひしひしと感じました。

越前市では、10数年前からこういう活動をされていて、しかも地域の歴史資産を細かく拾い出すという作業をしたうえで、町家の改修モデルを作っていたりとか、工業高校に来てもらったりして拡げていく、さらには隣の今庄のほうへ拡がっていくというような連携を話の中で伺うことができました。

南越前町今庄でも、工業高校の学生さんに来てもらったり、地元の小学生に対して子どもの時から地域のまち並み・町家を学んでもらおうという取り組みを熱心にされているということをお伺いすることができました。

勝山市では、楽しい取り組みをされているというのが印象的で、にわとりの骨で恐竜を作るとか、恐竜の足跡を作るとか、竹のプランターを作るとか、またそれを今庄に飾ってもらうということで広めているということに感心させてもらいました。

鯖江市では、地域の文化として前面に押し出され、それをまちづくりのキーにしていく、しかも最初は公民館の館長さんという立場から、公民館がまちづくりの主導だったのをいかに地域の人たちが自主的に拡げていくことができるかということに苦労されている様子を伺うことができました。

やはり福井県は人材が豊富だなと感じました。また、地域にずっと住んでいる方が多いというのが、住教育、住まい・まちづくり学習をあげやすく、血縁性も含めてネ

ットワークが濃いというのが大阪との大きな違いだと思います。それが、この地域で住まいづくり・まちづくりを行っていく根っこにあるのではないかと思います。地域の流動性が少ないというのは、良い面も悪い面もあると思いますが、住まいづくり・まちづくりについては、ずっとそこに住んでいらっしゃる人がいるということは、これからの発展性があるのではないかと思います。

今日は、私の方がむしろそれぞれの地域に行き、拝見させていただいて、勉強させてもらわないといけないことがたくさん伺えて、本当にありがとうございました。

《コーディネーター 五十嵐》

碓田先生、ありがとうございました。私も福井に生まれ育ってきて、若い時はどうしてもまちづくりは煩わしいものと思っていました。また一方で、変な安心感とありますが、私がまちづくりに関わらなくても、自分の地元は良いままずっと続くというイメージが、どことなくありました。この年齢になり、今、そんな感覚はありません。

私は2年前に町内会長を務めましたが、指導していただいた方は高齢で、この方たちがいなくなったら私たちはつないでいくことができるのかなと不安に感じていました。文化を維持していくということが難しくなっている時代ですが、まちづくり活動や関わっておられる方々の想いを知ること、まちの魅力が伝わり、活動が広がってゆくと感じます。

今日のシンポジウムで色々なまちづくりの活動を紹介できたことで、会場にお越しいただいた皆様の次の行動に結びつけば、

大変価値のある時間になったのではないかと
思っています。

そろそろ時間となりましたので、これで
パネルディスカッションは終了させていた
だきます。どうもありがとうございました。

《事務局 坂川》

あっという間の2時間でしたが、考える
ことが多く、とても有意義な時間を共有で
きたのではないかと思います。

これにて住教育シンポジウムを終了させ
ていただきます。本日は誠にありがとうご
ざいました。

住教育シンポジウム 参加者アンケート

本日は、住教育シンポジウムにご参加いただき、ありがとうございました。
今後の住教育活動の参考としたいため、アンケートにご協力をお願いいたします。
皆様の率直なご感想・ご意見をお聞かせください。

1 あなたの職業について教えてください。

- A. 住宅関係従事者 B. 住宅関係以外従事者 C. 無職 D. 学生 E. その他

2 あなたはまちづくり活動に参加していますか。

- A. 積極的に参加している B. 参加している
C. 興味はあるが参加していない D. 参加していない

3 あなたは「住教育」という言葉を聞いたことがありますか。

- A. ある B. ない

4 今回のシンポジウムを何で知りましたか。(複数回答可)

- A. 案内チラシ B. ホームページ C. 新聞 D. 県の広報 E. 職場からの案内
F. 知人の紹介 G. メールマガジン H. その他 ()

5 今回のシンポジウムの内容はいかがでしたか。

- A. 大変良かった B. 良かった C. あまり良くなかった D. 良くなかった
上記の選択理由 ()

6 今回のシンポジウムで、あなたの住教育への関心や理解は深まりましたか。

- A. 大変深まった B. 深まった C. あまり深まらなかった D. 深まらなかった
上記の選択理由 ()

7 今回のシンポジウムで、特に興味深かったことは何ですか。

()

8 今後、住教育で取り上げたらよいと思う内容、その他ご意見等があれば教えてください。

()

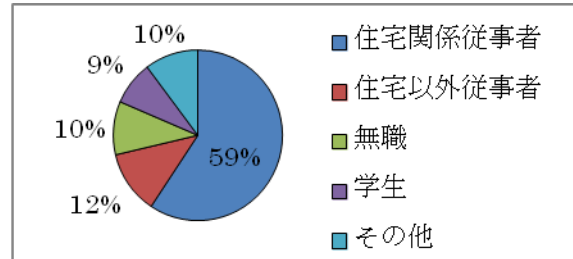
ご協力いただきありがとうございました。

参加者アンケート結果

シンポジウム参加者数（出演者除く）	143人
アンケート回収数	108枚
アンケート回収率	75.5%

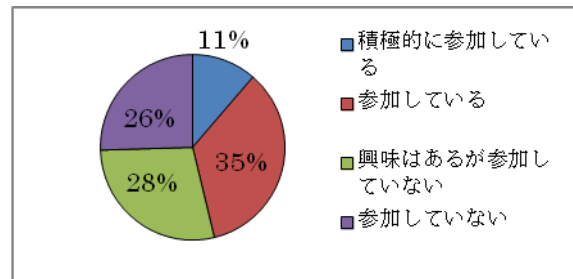
Q1 あなたの職業について教えてください。

住宅関係従事者	64
住宅以外従事者	13
無職	11
学生	9
その他	11



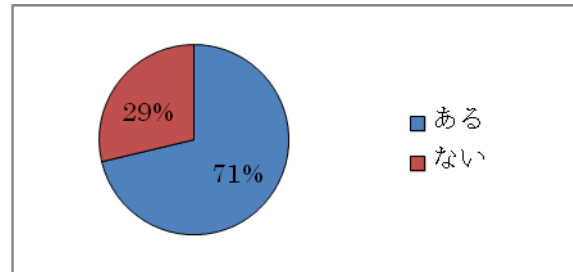
Q2 あなたはまちづくり活動に参加していますか。

積極的に参加している	12
参加している	37
興味はあるが参加していない	30
参加していない	27



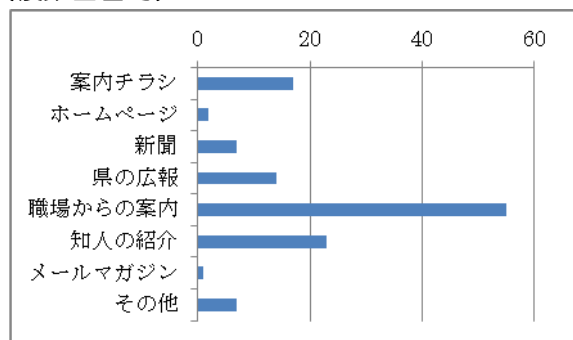
Q3 あなたは「住教育」という言葉を聞いたことがありますか。

ある	77
ない	31



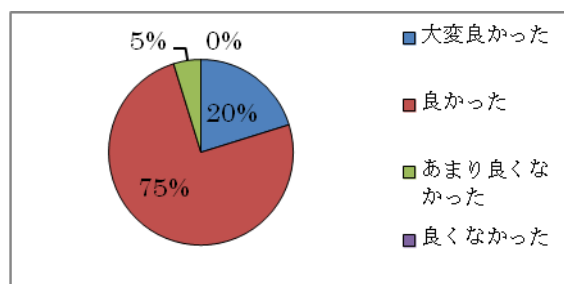
Q4 今回のシンポジウムを何で知りましたか。（複数回答可）

案内チラシ	17
ホームページ	2
新聞	7
県の広報	14
職場からの案内	55
知人の紹介	23
メールマガジン	1
その他	7



Q5 今回のシンポジウムの内容はいかがでしたか。

大変良かった	21
良かった	78
あまり良くなかった	5
良くなかった	0



選択理由

[大変良かった]

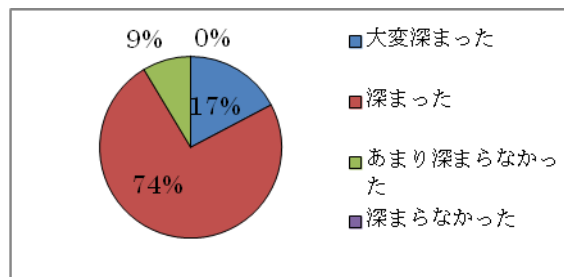
- ・住教育についてこれまでは家に関する教育かと思っていたが、地域全体の取り組みであることを知ることができた。生活の教育なのですね。
- ・子供達に地域の伝統を伝えるために、ボランティアの人達が伝えているのが大変良かった。
- ・まちづくりのきっかけ、遊びやまつり（地域）を通じて発展させることの重要性の認識。
- ・各地域のまちづくり活動状況。

[良かった]

- ・スライド写真を使っての説明がとてもわかりやすかった。
- ・他地区の取組がわかった。
- ・パネリストの活動を聞いたこと。
- ・実際活動されている方の活動内容や意識の高さを知れたので。
- ・まちづくりについて、じっくり考えられた。
- ・普段考えない事を考えるきっかけとなった。
- ・良かったが、発表（特に講師の内容）がテーマ性をもたせてもよかったのでは… まちづくりの紹介が多かったので、退屈した。
- ・各まちづくり活動の内容が理解できた。
- ・説明が上手で、とてもいろいろ分かった。
- ・基調講演が分かりやすく認識が深まった。
- ・住民参加、地域愛を感じた。
- ・碓田先生の講演で多くの方が、地域活動をしていることを知った。
- ・身近なことが良かった。
- ・各地区の行事内容が良かった（子供を交えた行事）。
- ・住教育について初めて知ったが実例をあげて説明してあったのでわかりやすかった。
- ・各地域での住まいやまちづくりの活動内容を知ることができた。
- ・地域資源として、まつりやしつらい等の文化的側面がまちづくりの機運醸成を図る事例として多いことがわかった。

Q6 今回のシンポジウムで、あなたの住教育への関心や理解は深まりましたか。

大変深まった	18
深まった	77
あまり深まらなかった	9
深まらなかった	0



選択理由

[大変深まった]

- ・今までの私の住教育のイメージは、家の教育というものでしたが、地域文化すべてを含めたものというイメージに変わりました。しかし住教育というものがどういうものかということがまだ理解しきれていないので、もっと勉強したい。
- ・将来、生まれてくる子供達に今日学んだ事を教えなければならないと思った。
- ・次世代に継承する街づくりの人的なもの、ハード・ソフト両面での方策には大変参考になった。伝統行事の掘り起こしをもっと行政や教育機関がやるべき。

[深まった]

- ・何をすれば良いか、何から始めれば良いかがわかった。
- ・住教育と一言と言っても「住まい」「まち並み」「住まい方」と様々な視点がある為。
- ・どういったことが住教育なのか具体的に知ることができたので。
- ・自分が知らないだけで、いろいろな取り組みが行われているのがわかった。
- ・様々な地区の努力が同え、住民もまたさらに一人一役で立ち上がる必要ありと感じた。
- ・モノ、コト、ヒトという地域資源のキーワードが印象深かった。
- ・まちづくりのきっかけ、遊びやまつり（地域）を通じて発展させることの重要性の認識。
- ・住まい方の日本らしい文化を次代の子供に伝える。
- ・第一部の講演会では、住まいや町に関心をもらうにはどうすればよいかを事例を挙げながらの説明で非常にわかりやすかったし、今後のヒントにもなる考え方がたくさん見つかりました。第二部では県内各地のその実践を紹介するものでしたが、各々の説明が長く、もっとパネリストさんの意見や考えを拝聴したかったです。
- ・古き良き物は残してそこで生活していけたらと思います。
- ・子供の時から“住む”とか“景観”の授業が家庭科以外に“図画（絵画）”・“工作”・“社会科”で教えることはいいと思った。
- ・まちづくりは、人づくり、さらに地域のコミュニティーが重要である。
- ・古来より続く地域性を大事にしていく中で、住まい方に対して理解が深まるものだと感じた。

[あまり深まらなかった]

- ・自分のことで時間を使っているのでなかなか参加したり見学するのが難しい。
- ・誤ったまちづくりの例を参考にディスカッションしてはどうか。
- ・工作上、参加が難しいから。

Q7 今回のシンポジウムで、特に興味深かったことは何ですか。

- ・大阪教育大学の碓田智子先生の地域資源を活用した住まい・まちづくり学習。
- ・大阪教育大学の碓田智子さんのお話を聞いて、イベントなどが大切だということが分かった。
- ・居住文化は、モノ、コト、ヒトの3つでできているなんて知らなかった。昔の町並みや昔の家屋を子供たちに教えたり体験させたりして町おこしや発展させたりしていてすごいと思った。
- ・祭の時の街並の事例（町家）。
- ・ひな人形やつくりものでのまちづくりについて。
- ・伝統的行事のみでなく、イベント型ひな祭り等の身近な行事をきっかけとした取組が行われていること。
- ・町おこしイベントとして、ひなまつりイベントを行っている地域が全国で120ヶ所もあるということ。こういった住民自身が参加することにより、自身の住む町並みの良さを知る良い機会であると感じる。
- ・伝統行事としてのつくりもの（復活）。
- ・H10以降の新しい町おこし型の（ひな）まつりが急増しているという事実、必ずしも伝統とつながらないまつりが、まちぐるみで実現している点が面白かった。
- ・まつりのしつらいに興味をもちました。やはり伝統行事には興味深いことが多くあり、まちづくりを考えるとときには、これを知ることが大切だと感じました。
- ・各地区にいろんなお祭りがあるのにとっても興味をもちました。
- ・まつりのしつらいで家の中の空間演出など。
- ・碓田先生の講演-祭りを通して住まいを考え町家の保存や活用につながるという活動。各地域での“住教育”のとりくみ⇒情熱的なリーダーの存在が必要？
- ・住教育=住まいづくり・まちづくり。
- ・住教育について。
- ・住民自身の取組が必要。
- ・身近なまちづくりへのかかわり方。
- ・住教育がまちづくりと関係深いことが理解できた。
- ・住教育のあり方などがよくわかった。
- ・住教育についてのパネルディスカッションに興味がありました。福井の住まい方の特性。
- ・パネルディスカッションで他の地区における活動の実例に触れることができ、参考となった。
- ・各パネリストがボランティア的な立場でまちづくりに取り組むという話。
- ・各地区のパネリストさんの発表、それぞれ地域に根づいた活動をされていて興味深かった。
- ・パネリストの地区では地域資源をうまくまちづくりに活用しておられた。まちづくりを住まいづくりにどのように今後つなげるのか興味深く見守りたい。
- ・まちづくりへのプロセス内容。
- ・4つのパネリストの住教育の取り組み方がよく分かりやすかった。
- ・パネルディスカッションがとてもよかった。
- ・各地で活動している人がいること。
- ・各地域のまちづくりの活動内容。

- ・各地域での具体的事例、紹介。
- ・まちづくり活動に積極的に取り組む機運が高まりつつあることを改めて感じとれた。
- ・いかにして地域の人と住教育をしていくのかを様々な例を通じて知れたこと。
- ・身近なところでも昔ながらの沢山の行事が行われている事に驚かされた。
- ・事例はどれも良かった。いろんな地域の文化を残していくことは大切ですね。私も地元の伝統的な文化の保存会に所属しているので、まち並みの維持、いや向上のため、積極的に参加していきます。
- ・地域の技術に愛着をもって、次世代につなげる努力に感動。
- ・地元の歴史がわかって大変よかった。
- ・古い町並みを残すこと、子供達に伝えることは大切だと思った。
- ・まつりのしつらいが、多くの地方で似た事を実施している。越前市街地が300年前の街路を残している。
- ・越前市タンス町界限 小川利男氏の話。
- ・武生の活動の歴史の長さ。工業高校との活動。
- ・南越地区の歴史的建築物を生かすというのは興味深かった。工業高校や大学生に参加してもらい活動を広げてもらうなど。
- ・今庄旅籠宿の地元密着の地道な活動。
- ・今庄宿の再生のこと。
- ・勝山地区での竹のプランター作り。(竹を使用したバーベキューやキャンプをするとおもしろいと思った。)
- ・石畝さんに対して、にわたりの骨で恐竜の模型を作った事や、良く頑張っていると感じられた。
- ・勝山、吉江両地区での取り組み。
- ・「地域の文化力の向上」「地域の熱い思いと愛情」何を次世代に残していくか、大人が子供のころから、どのように大人と接して文化を教えてもらってきたことを思いかえしながら、さらに受け継ぎ、残していく方法を見直していく。
- ・これから協力出来ることがあればやっていきたい。
- ・長い期間の活動が大事なんだと思いました。地域の宝物はたくさんあるって事。
- ・子供達にいろんな体験をさせている事はとてもすばらしい事だと思います。少しでも興味を持ってもらいさらに次の世代の子達に伝えていってもらいたいです。学校教育の中でもそのような時間をもっと増やし、連携を深めていくことも重要になってくると思います。
- ・住まいを教材に子供達に伝統を伝えることは、とても大切なことだと感じました。
- ・福井県で8つの地区が、地域の発展に貢献していることに興味を持ちました。
- ・住環境以外に住まい方のソフト面へのシフトが大切であろう。
- ・大人との交流館(建物)との交流 ⇔ まつりで童子が学ぶものは多いでしょうね。
- ・日常の昔ながらの行事を継承することが重要である。それを自然なものとして広く知って貰う広報活動の必要性を感じとり、行政での展開をすることが良いのでは。
- ・祭を中心、イベントが中心、まち並みが中心の話は興味深かったが、もっと身近な住宅街での研究を深めたものを聞きたかった。また住教育の広さに驚きました。

Q8 今後、住教育で取り上げたらよいと思う内容、その他ご意見等があれば教えてください。

- ・中高学生の発表もあってよいのでは？
- ・子どもを対象とした内容を取り上げて欲しいと考える。
- ・大学の中で教育学部と建築学科とのつながりをより強く関わりをもち、より多くのことを子供たちに伝える方法を深めていく。大人も関心が持てる住教育のきっかけづくり、仕事もいけど仕事以外に地域に目を向けることができる心の余裕の持ち方。
- ・まちづくりは「人づくり」の気持ちで。子供・若者参加型のイベントをこれからも増やせるよう、学校教育カリキュラムに取り入れる機会も増やして頂きたい。
- ・町内会の子供達が参加出来る行事を積極的に立案、企画を住民がする。
- ・子どもから大人まで楽しめるイベントを考えてほしいです。
- ・小・中・高への住宅関係者の関わり。
- ・民家（いなかの家）←町中の子が生活してみるという体験 町家←いなかの子が生活してみるという体験 「住教育」という言葉で具体的内容のイメージがつかない。
- ・小学校の親・子にも今大会の案内を工作・図画の先生を中心に出して、大工さんの「トンカチ広場」「カンナがけ実演コーナー」に来てもらって手で実感してもらいたい。今後いいでしょう。
- ・工業高校や大学との協働は行われているようだが、小中学校での住教育がまだまだなのかなという印象があったので、もっと子どもたちとの活動を進めていただきたい。
- ・これからの地域をささえる若者や子ども達を巻き込んで取り組んでいただければありがたいと思う。“次世代を育てる”が大事なテーマだと思う。ジュニア巡見（小川先生）の立ち上げは素晴らしいと思う。
- ・福井にも住まい関係の技術を習得できる学校が出来てほしいです。（北陸では富山にありますよね）
- ・住教育と言うことだが、県の教育関係部所とのコンセンサス・連携がとれていないのではないかな。私の知人の教員に聞いてみたが全く聞いたことがないとのことであった。せっかくよいこととするのだから、建築関係者の一人よがりをするのではなく横のつながりを作って進めていってはどうでしょうか。
- ・“地域資源を活用”が強調されすぎ。街並みが残っている地域が主であったが、実際はそうではない地域が多い。
- ・新しく「つくりあげる」まちづくりへも踏み込んで欲しかったと思う。もっと底辺の普段の努力の積み重ねで「つくりあげる」文化も対象にして欲しかった。“かっこう”の良すぎる事例ばかりで現実的ではないのが感想。
- ・祭や歴史のある地域では取り組みやすいと思うが、そうでない地域（例えばマンション・アパート・新しくできた住宅地など）の者へは、住教育をどう広めていくべきか。流動性あるところでは難しいのかな。本日は大変良いシンポジウムを開催いただき、ありがとうございました。
- ・今回の発表をされた地区は古い街なみや建築が残っているものばかりでした。文化を大事にし継承することも大事ですが、福井市のような古いものが残っていない地区での住教育活動ももっとやってもらいたい。
- ・昔の家屋や人通りが少ない家を改修や体験活動などをして活気のある通りにすれば良いと思う。

- ・ 伝統行事への参加。
- ・ 勝山片瀬地区・周辺での竹を使用した催しをしてほしい。たとえば隣りの平泉寺地区とタイアップして平泉寺街道で日本一キョリが長い、竹を使った流しソーメン大会とか面白いと思う。（他、竹を使用したバーベキューやキャンプをすると面白いと思った。）
- ・ 時間をかけた地道なまちづくりや、まちづくり実践教育の事例、および、まちづくりの世代間継承の取組。
- ・ 地域に伝わる財産に誇りを持ってもらう暮らし方、建築素材を知り、伝えていく活動。
- ・ 雨・露をしのぐ家から、憩いの場・文化の地の役割を持ってきている。生活の場を視点としての、住教育の内容をお願いしたい。
- ・ どうして今の活動を続けるかという課題。
- ・ 省エネ関係、 2、3世帯のあり方。
- ・ 家庭や地域での昔から受け継がれている行事や考えを広く拾い上げ、それを教育や広報して行くと良いのでは。
- ・ 商店街のある街並みに近接して暮らすことをテーマにした住教育モデルの観点とした取り組みも、別の切り口としてあってもよいのではないか。住教育を文化的見方から、経済的見方から取り組んでみても面白い。
- ・ 身近な取り組みから住まいづくりを考えること。継続性が重要であるということ。住民が主役。日々の営みがまちをつくる。
- ・ 自治体ごとの活動を行う際、もっと住民に知らせる事が重要だと思います。“周知”の量が少ないかと…。今後のシンポジウムでは専門家の意見ではなく活動をしている住民の方々の意見が聞きたいです。
- ・ 建築関係者が多く見えたが、行政・教育一般に広くご案内してよい。
- ・ 段上と参加者との討議・討論が少々でもあれば良かったと思う。

福井県土木部建築住宅課

〒910-8580 福井市大手3丁目17番1号

TEL 0776-20-0505

FAX 0776-20-0693

E-mail kenjyu@pref.fukui.lg.jp

